

全国の在来タナゴ類の保全技術に関するシンポジウムの開催

NPO法人日本国際湿地保全連合

辻井 達一¹⁾・紀平 大二郎¹⁾

Symposium about conservations of a bitterling fish in Japan

Wetland International JAPAN

Tatsuichi Tsujii and Daijiro Kihira

我が国の国土は複雑な地形から様々なタイプの水環境を創出し、多種多様な河川・湖沼が高密度に存在する。河川にはワンドやタマリ等の固有の水環境を創出し、湖沼には緯度経度や大小によって様々な環境特性を持っている。そのような複雑で多様な水環境には豊富な水生生物が生息し、魚類においても地域固有の種類が多数生息している。とくに魚類の中でもタナゴ属は地域固有の種類が多く、国内に3属15種(亜種)が存在するが、現在、環境省レッドリストには国内希少野生動植物種であるミヤコタナゴ、イタセンパラ、スイゲンゼニタナゴを始めとする10種が掲載されている。さらに都道府県版レッドリストを含めると、現在、日本産タナゴ類は全ての種が絶滅の危機に瀕している。減少の主な要因はタナゴ類のほとんどが、小川や溜池などの人為的改変の影響の受けやすい身近な水環境に依存しているためである。現在、行政や研究者が中心となって全国で在来タナゴ類の保全事業が展開しているが、タナゴ類の仲間は地域固有の種類が多く、生態や環境特性によっては保全保護の方策は様々である。そこで、タナゴ類を代表とする身近な自然環境の保全について市民の関心と理解を深めることを目的として、在来タナゴ類の保護保全に関わる専門家や活動者や地元行政が集い、地域活性や保全技術に関する情報を交換できるためのシンポジウムを開催した。

全国の在来タナゴ類の生息地の現状と保全技術に関するシンポジウムを「全国タナゴサミット in 霞ヶ

浦」と題して、日本の湖沼を代表する霞ヶ浦において2007年12月15日および16日の2日間で開催し、162名の参加を得ることができた。シンポジウム初日の12月15日は、茨城県霞ヶ浦環境科学センターの会場において、タナゴ類に係る研究者、保全活動者、行政関係者によって各種の生物学的知見や保全技術、生息地の現状や問題点についての講演発表、パネルディスカッション、ポスター発表を行った。発表では、日本列島の各地に生息する地域固有の在来タナゴ類の分類、生息地の現状、外来生物法によって新しく規制されることになったオオクチバス等の特定外来種の防除、在来タナゴとドブガイの共生を目指した里地の溜池の管理方法、行政による希少タナゴの研究と保全の取り組みについての情報を紹介することができた。翌12月16日には、霞ヶ浦に生息する魚類の現状についても理解を深めるために、地元漁協の協力を得て、湖に設置した張網漁の体験見学を行った。その結果、捕獲された魚類にはアカヒレタビラ、タナゴ等の在来のタナゴ類を確認することができたが、特定外来種のオオクチバス、ブルーギルの他、ハスやワタカ等の琵琶湖由来の国内移入種も多く含まれており、霞ヶ浦の生態系が外来種によって脅かされている現状を知ることができた。今回のシンポジウムと現地見学を通して、身近な魚であるタナゴ類をシンボルとした日本の淡水生態系の現状と問題について市民向けに普及啓発することができた。

1) 〒103-0013東京都中央区日本橋人形町3-7-3 人形町ビル6F



写真1 シンポジウム会場の様子



写真3 霞ヶ浦の定置網漁の見学

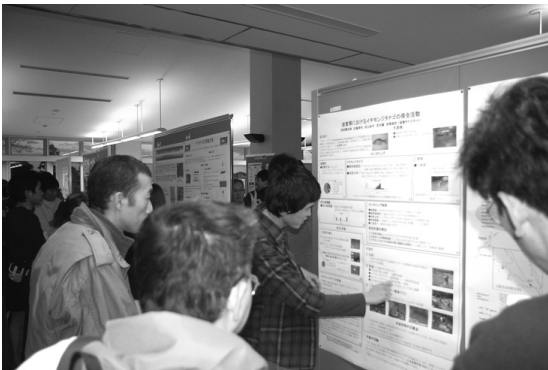


写真2 ポスター発表の様子



写真4 捕獲された魚類